



国際標準論理文章能力検定

International Standard Competency
Test of Logical Thinking

Level 8

2011年度 第1回

問題用紙

検定開始の合図があるまで、問題を開いてはいけません。
まず、下記の注意をよく読んでください。

● 受検上の注意 ●

1. 検定時間は60分です。
2. 検定開始前に答案用紙に受検番号・氏名・生年月日を必ず記入してください。
3. 検定が始まって、印刷が見えにくかったり、ページがおかしかったりしていたら、手をあげて監督者に知らせてください。
4. 問題のあいているところは自由に利用してください。
5. 問題は、答案用紙と一緒に回収します。

問題 I

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

有機的ってことばを知っていますか。

そうです。無機的の反意語です。

有機栽培、有機肥料、有機化合物など、最近、有機的ということばをよく聞くと思います。

有機的とは、本来、様々な要素から全体が成り立ち、それが全体として調和が取れている状態を指します。

簡単に言うと、すべての生命体は有機体です。人間の身体は、脳、心臓、胃袋、排出器官、あるいは血管にリンパ腺と様々な要素から成り立ち、それが絶えず全体として調和を保っていますね。

たとえば、脳の一部が破壊されただけで、身体全体の調和が崩れ、その個体全部が死を迎えることさえあるのです。

生き物はすべて有機的にできているのです。

それに対して、石は無機物です。半分に割っても石ですし、粉々にすれば小石です。小石であっても、石自体には違いありません。それが無機物の性質です。

今、私はこの「有機的」ということばが現代社会を考える上でのキーワードになるのではないかと思っています。

岩田慶治氏は、著書「コスモスの思想」の中で、イバン族の臼の文化について紹介しています。

イバン族ではもともと村中の人々が集まって、臼をついたのです。みんなが拍子を合わせて、いい音が出るように臼をつきます。なぜ、みんなが気持ちをそろえて、いい音で臼をつかなければならないのかというと、それは神様に感謝の気持ちを捧げるためなのです。それはイバン族にとっての宗教的行為でした。

そして、臼をつくことで、村中の人々との間に会話が生まれます。ときには、村人たちは一つの家族のように、

いつでも日常的なことから村の大事な取り決めまで話し合うことができます。

そこで村人たちのコミュニケーションがなされ、村には連帯感が生まれます。

つまり、臼の文化はイバン族の音楽であり、労働であり、コミュニケーションの場であり、連帯感を生むものであり、ときには宗教でさえあったのです。

文化とはこのように様々な要素が絡み合って一つとなり、そのどの要素も切り離すことができないものでした。

ところが、近代に入って、イバン族にも動力精米器が導入されたのです。イバン族の村の生産力は格段に高まりました。村人たちは週に一回製粉所に米を運びに行き、後は家の中でそれぞれがじっとしているようになりました。

もう今ではほとんどと小気味のいい臼の音は聞こえなくなってしまいました。動力精米器の音は耳を塞ぎたくなるようなものでした。

村から連帯感は消え、ひとりひとりに孤独が襲いました。そして、最後には神が死んだのです。

イバン族に起きたことは、決してどこかのおとぎ話ではなく、私たちの中に起こった「今」の話なのです。

近代合理主義が私たちの文化を変えたのです。合理主義はあらゆるものをバラバラに切り離し、それを無機的に扱います。

それに対して、文化は生き物です。生き物は生き物としか相容れません。合理主義と生き物とは相容れないものだったのです。

岩田慶治氏は、私たちの文化の変容を、魚の比喩を使って説明しています。

ある人が「魚の頭って、何ですか」と聞いたところ、生きた魚の頭を包丁でちよん切って、「はい、これが魚の頭です」と言って、それを差し出したのです。

魚は生きて水の中で泳いでこそ魚、まな板の上でちよん切られた魚は、生きた魚とは言えません。

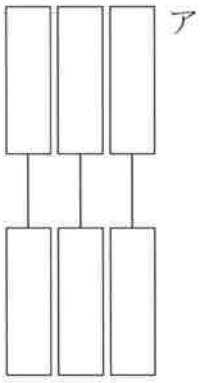
このたとえ話が人間だとしたなら、もっと話はグロテスクなものになります。人間の頭をもっと良くしようとして、その頭をちよん切って、コンピューターに変えたとしましょう。その結果、その人間は死んでしまいました。

第一問 傍線部を引いた次の文の構造図として最も適切なものを、次の選択肢から選びなさい。

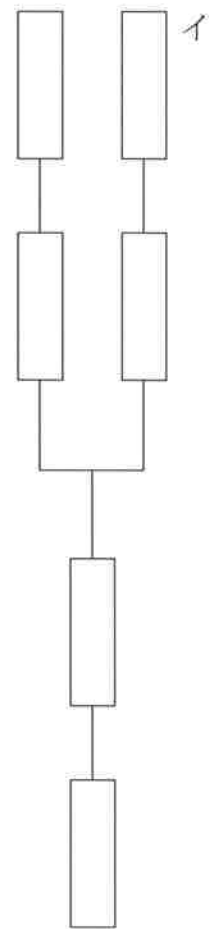
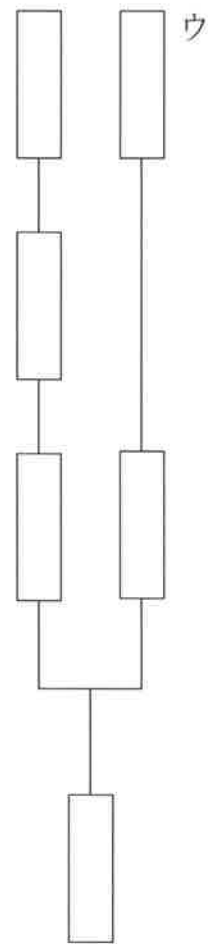
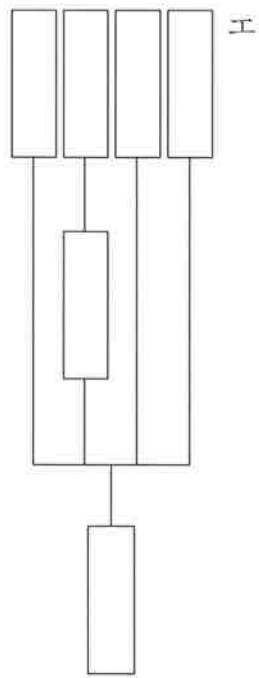
例 むずかしそうな本が古い机に置いてある。



イバン族では もともと 村中の人々が 集まって、 臼を ついたのです。



第二問 問題文を四つの段落に分け、それぞれの頭の段落の五字（句読点を含む）を抜き出さない。



第三問

筆者が最も言いたいことを、次の選択肢の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 生きものはすべて有機的であること。
- イ イバン族の文化が合理主義によって変容したこと。
- ウ 合理主義が私たちの文化を変えたこと。
- エ 頭を切られた魚はもはや魚と言えないこと。

第四問

今、環境問題が深刻な主題となっています。環境問題の根本原因について、問題文の内容に即して、三十字以内で指摘しなさい。

ただし、「近代合理主義」「自然環境」という言葉を必ず用いなさい。

問題Ⅱ 小説

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

或雨のふる秋の日、わたしは或人を訪ねる為に横浜の山手を歩いて行った。この辺の荒廢は震災当時と殆ど変わっていなかった。もし少しでも変わっているとすれば、それは一面にスレエトの屋根や煉瓦の壁の落ち重なった中に藜の伸びているだけだった。現に或家の崩れた跡には蓋をあけた弓なりのピアノさへ、半ば壁にひしがれたまま、つややかに鍵盤を濡らしていた。のみならず大小さまざまの譜本もかすかに色づいた藜の中に桃色、水色、薄黄色などの横文字の表紙を濡らしていた。

わたしはわたしの訪ねた人と或こみ入った用件を話した。話は容易に片づかなかった。わたしはとうとう夜に入った後、やっとその人の家を辞することにした。(1) 近近にもう一度面談を約した上のことだった。

雨は幸いにも上っていた。おまけに月も風立った空に時々光を洩らしていた。わたしは汽車に乗り遅れぬ為に(煙草の吸われぬ省線電車は勿論わたしには禁もつだった。)出来るだけ足を早めて行った。

すると突然聞えたのは誰かのピアノを打った音だった。いや、「打った」と言うよりもむしろ触った音だった。わたしは思わず足をゆるめ、荒涼としたあたりを眺めまわした。ピアノは丁度月の光に細長い鍵盤を仄めかせていた、あの藜の中にあるピアノは。――しかし人かげはどこにもなかった。

それはたった一音だった。が、ピアノには違いなかった。わたしは多少無気味になり、もう一度足を早めようとした。その時わたしの後ろにしたピアノは確かに又かすかに音を出した。わたしは勿論振りかえらずにさっさと足を早めつづけた、湿気を孕んだ一陣の風のわたしを送るのを感じながら。……

わたしはこのピアノの音に超自然の解釈を加えるには余りにリアリストに違ひなかった。成程人かげは見えない

かったにしろ、あの崩れた壁のあたりに猫でも潜んでいたかも知れない。若し猫ではなかったとすれば、——わたしはまだその外にもいたちだのひきがえるだのを数へていた。(2)とにかく人手を借らずにピアノの鳴ったのは不思議だった。

五日ばかりたった後、わたしは同じ用件の為と同じ山手を通りかゝった。ピアノは不相変ひっそりと藜の中に蹲っていた。桃色、水色、薄黄色などの譜本の散乱していることも(3)この前に変らなかつた。只きようはそれ等は勿論、崩れ落ちた煉瓦やスレットも秋晴れの日の光にかがやいていた。

わたしは譜本を踏まぬようにピアノの前へ歩み寄った。ピアノは今日あたりに見れば、鍵盤の象牙も光沢を失い、蓋の漆も剥落していた。殊に脚には海老かづらに似た一すじの蔓草もからみついていた。わたしはこのピアノを前に何か失望に近いものを感じた。

「第一これでも鳴るのかしら。」

わたしはこう独り語を言った。(4)ピアノはその拍子に忽ちかすかに音を発した。それはほとんどわたしの疑惑を叱ったかと思ふ位だった。しかしわたしは驚かなかつた。のみならず微笑の浮んだのを感じた。ピアノは今も日の光に白じらと鍵盤をひろげていた。が、そこにはいつの間にか落ち栗が一つ転がっていた。

わたしは往来へ引き返した後、もう一度この廢墟をふり返った。やつと氣のついた栗の木はスレットの屋根に押されたまま、斜めにピアノをおおっていた。けれどもそれはどちらでも好かつた。わたしは只藜の中の弓なりのピアノに目を注いだ。あの去年の震災以来、誰も知らぬ音を保っていたピアノに。

芥川 龍之介「ピアノ」

第一問 (1) (4) に入る言葉を、次の選択肢の中からそれぞれ選びなさい。

やはり けれども それも すると

第二問

「突然聞えたのは誰かのピアノを打った音だった」とありますが、「わたし」はこの時ピアノが鳴った理由をどう考えましたか、次の選択肢から最も適切なものを一つ選びなさい。

ア 震災のため壊れたピアノがひとりでに鳴りだした。

イ 死んだピアノの持ち主が弾いていた。

ウ 湿気を孕んだ一陣の風がピアノを鳴らした。

エ 何か小動物がピアノの上に乗った。

第三問

次のア～オの体験を時間的順序に並べかえなさい。

ア 屋根に押されて、栗の木がピアノを斜めにおおっていたことに気がついた。

イ 月明かりの中で、人影がどこにもないのに、ピアノが一音鳴った。

ウ 雨の中、ピアノの鍵盤がツヤやかに濡れていた。

エ 日の光で、鍵盤の象牙も光沢を失っていた。

オ わたしが失望を感じたとき、ピアノはかすかな音を鳴らした。

第四問

「微笑の浮んだのを感じた」とありますが、その理由を二十字以内で答えなさい。

第五問

「それはどちらでも好かった」とありますが、その理由として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 栗の木がピアノを斜めにおおっていたから。

イ ピアノが鳴った原因がようやく分かったから。

ウ 震災以来、ピアノが音を保っていたから。

エ ピアノを鳴らした栗を拾ったから。

オ もう鳴らないのではないかと思ったピアノが、鳴ったから。

問題Ⅲ

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

書き言葉と話し言葉とでは大きく性質が異なっている。書き言葉、特にそれが活字となる文章であるならば、何度も推敲を重ね、完成品としてそれは提出される。一度提出された文章は書き手の痕跡が後々まで残り、後から訂正することは困難である。

それに対して、(1)は即興的である。言葉が話し手の口から飛び出した瞬間、それは宙に消え、二度と戻っては来ない。言葉は次々と口をついて出ては消えていく。話し言葉はそれ故即興的であり、決して完成品ではない。

書き言葉の対象は不特定多数の読者である。読み手が誰か分からないから、当然論理的に書かなければならない。

(2)はそれ自体が自己完結していて、原則として他の補助手段がないからである。

(3)は相手が誰かによって、その話し方は異なってくる。家族か友人なのか、初対面の人なのか、上司か部下か、複数の人と話すのか、大勢の人に対してなのかで、当然話し方が異なってくる。

そういった意味では、(4)はその人との人間関係、さらには社会的関係と密接な関係を持つ。その人の話し方を観察すれば、その人が相手との関係をどうとらえているのか、その集団とどのような関わりを持つとうとしていいるのかが分かる。

そして、もう一つ。会話は言葉だけでなく、声の大きさ、質、さらには表情や仕草など、様々な補助的要素が加わってくる。

第一問

(1) (3) (4) には、ア「書き言葉」か、イ「話し言葉」が入ります。それぞれどちらが入るのか、記号で答えなさい。

第二問

「それ自体が自己完結」とは具体的にどういうことか、三十字以内で説明しなさい。

問題Ⅳ デイベート・小論文

次の文章を読んで、以下の問に答えなさい。

意見A 原子力発電に賛成

2011年3月に東日本を襲った大地震と、それに伴う福島原子力発電所の事故は、従来の日本の原子力政策を見直さなければといった気運を起しました。

確かに原発事故は二度と起こさないように、万全の対策を講じなければならないのですが、かといって原子力発電を停止せよという意見には賛成できません。

原発事故直後に、計画停電が行われました。電車は本数を減らし、通勤ラッシュ時に大混乱に陥ったり、東京などは駅の構内も明かりを落とし、街のネオンも減らしたので、まるで街全体が暗く沈み込んだような印象を与えました。

それだけではありません。水洗トイレが使えなくなったり、エレベーターが止まるなど、私たちの生活自体に支障を来したのです。その時、私たちは電気の重要性を身をもって感じました。電気がなければ、私たちの文化的生活を維持することなどできないのです。もはや、原始時代の状態に戻りすることなど、今の私たちには到底考えることができません。たとえ、原発が絶対安全だという神話が崩壊したとしても、今の生活を変えることは不可能です。

もちろん、原発よりも環境にやさしく、安全な代替エネルギーが開発されるにこしたことはありません。ところが、水力・太陽光・地熱・風力など、現在開発中の代替エネルギーは天候に左右されたり、環境を破壊したりと、どれも理想的なものとは言いがたいのです。しかも、開発コストが膨大にかかります。

やはり、すべての原発エネルギーを代替エネルギーに変えることは、今の状況を検討したとき現実的だとは言えないでしょう。

意見B 原子力発電に反対

東日本大震災による福島原子力発電所の事故により、原発の安全神話が完全に崩壊しました。

それでも化石燃料による二酸化炭素排出の問題などを理由に、原発を推進せよといった意見がいまだに大手を振っているのが現状です。

たしかに、電力供給の問題や石油・石炭など化石燃料による地球温暖化の問題も避けては通れません。

しかし、これは「命」の問題なのです。私たちの「命」だけでなく、放射能は私たちの子孫の「命」まで蝕んでいくのです。そして、「命」は何よりも最優先されなければなりません。

たとえ電力不足のため多少の不自由を強いられようとも、経済成長が止まって深刻な不況が押し寄せても、「命」のためには私たちは甘んじてそれらを受け入れなければなりません。

それにしても、本当に原発だけに頼らなければならぬのでしょうか？

現在、原発は日本のエネルギーのおよそ30%を供給しているにすぎません。水力、太陽熱、地熱、風力と、様々な代替エネルギーが今や開発されています。

それなのに、原発だけに頼り、環境にやさしい他の代替エネルギーに目を向けようとしなのは、私たちの将来に目を向けていないことになります。

もちろん、これらの代替エネルギーはまだ様々な問題を抱えていることでしょう。だが、私たちの科学技術の進歩の方向を、これらのエネルギー開発に向ければ必ず問題は解決します。

何よりも大切なのは、私たちの、そして地球の「命」なのですから。

そこで、これらの代替エネルギーの実用化は、利潤追求を最優先する企業だけにまかせるのではなく、国家的政策として計画的に遂行していくべきです。

そういった意味では、国家的レベルで、エネルギー政策の転換を図る必要があるのではないのでしょうか。

第一問 意見Aは、原発賛成です。その理由として重要なものを二つ選び、それぞれ二十字以内で答えなさい。

第二問 意見Bは、原発反対です。その理由として重要なものを二つ選び、それぞれ二十字以内で答えなさい。

第三問 あなたは意見Aに賛成したとしましょう。問一でああなたが選んだ理由をもとに、問二でああなたが選んだ理由に対して、五十字以内で反論を試みなさい。

第四問 あなたは意見Bに賛成したとしましょう。問二でああなたが選んだ理由をもとに、問一でああなたが選んだ理由に対して、五十字以内で反論を試みなさい。

